HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国語と日本語との受身の考察（1）：中国語の場合
Author(s)	邱, 林燕
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 16, 65-84
Issue Date	2013-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52636
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	departmental bulletin paper
File Information	JIMCTS16_04.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Jimcts

中国語と日本語との受身の考察(1)
―中国語の場合―

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士課程
邱　林燕

A study on Passive of Chinese and Japanese (1): The deference of mechanisms between the two languages

QIU Linyan

abstract

Comparative studies have been published on passive sentences in Chinese and Japanese and the conditions under which passive sentences are made have been discussed.

This study demonstrates that the conditions in Chinese are related to the transitivity of events, which appears in "telic event", "realistic event" and "individual event". In contrast to that, the conditions of Japanese Passive are related to effectiveness on the speaker, which is to be discussed in my future article.

In terms of modality, the passive in Chinese is assumed to be within the scope of proposition. On the contrast the Japanese passive suffix "rareru" carries the function of "modality", which will be discussed in the second part of this study.

1 はじめに

中国語に比べ、日本語の受身文は複雑だとよく言われている。様々な受身のサブタイプが提案されているが、研究者による意見の一致は見られていない。例えば、一つの分類基準として、元の能動文の項が受身文の主語となる「直接受身文」と、元の能動文の項でない名詞句が受身文の主語となる「間接受身文」を区別する研究がある（寺村［1982］、工藤［1990］、高見［1995］［2011］等）。また、間接受身文をさらに、持ち主の受身や自動詞の受身（間接受身）などに分ける研究もある（仁田［2009］等）。本稿では暫定的に以下のように日本語の受身文を（a）、（b）、（c）の三つグループに分類し、それに対応する中国語を示す。（a）グループはいわゆる「直接受身文」である。元の能動文の目的語が受け身文の主語になる受身文である。（b）グループはいわゆる「持ち主の受身文」と「体の部分の受身文」である。そして（c）グループは「自動詞の受身文」である。なお、以下の本稿の例文につける記号「＊」は非文を表す。「⇒」は中国語の文が日本語の直訳では非文となるが、言い方を変えると正しくなることを示す。「?」は文法性判断に揺れがある文を表す。

（a）グループ

（1）日本語：私は彼に殴られた。
　　中国語：我被他打了。

（2）日本語：そんなことを言ったら、彼に殴られる。
　　中国語：＊你要那**样说**的**话**，被他打。
　　⇒你要那**样说**的**话**，要被他打的。
　　（そんなことを言ったら、彼に殴られるよ。）

（b）グループ

（3）日本語：私は李さんに頭を殴られた。
　　cf. ＊私の頭は李さんに殴られた。
　　中国語：我被李四打了**头**。
　　cf. **我的头被李四打了**。

（4）日本語：私は泥棒に財布を盗まれた。
　　cf.?? 私の財布は泥棒に盗まれた。
　　中国語：**我被小偷偷**了**钱包**。
　　cf. 我的**钱包**被小**偷偷**了。

（5）日本語：彼はヤクザに父親を殺された。
　　cf. 彼の父親はヤクザに殺された。
　　中国語 ?他被**黑**社会**杀**了**父亲**。⇒他**父亲**被**黑**社会**杀**了。

（6）日本語：私は太郎に犬を殺された。
　　cf. ?私の犬は太郎に殺された。
　　中国語：??我被李四**杀**了小**狗**。⇒我的小**狗**被李四**杀**了。

（7）日本語：私は先生に論文を批判された。

邱林燕 QIU Linyan

cf. ??私の論文は先生に批判された。

中国語：＊我被老师批判了论文。⇒我的论文被老师批判了。

（c）グループ

（8）日本語：夜中子供に泣かれた。

中国語：＊半夜被孩子哭了。⇒半夜被孩子哭醒了。

（9）日本語：夜遅くお客さんに来られた。

中国語：＊夜里很晚的时候被客人来了。

⇒夜里很晚的时候客人来了。［害得我没休息好。］

（夜遅くお客さんが来た。［そのため、私はちゃんと休めなかった。］）

（10）日本語：忙しい時部下に休まれた。

中国語：＊正值很忙的时候被部下请假了。

⇒正值很忙的时候，部下请假了。［害得工作没能顺利进行。］

（忙しい時部下が休んだ。［そのため、仕事が順調に進まなかった。］）

日本語の受身が三つの下位グループに分けられたとしても、（a）（b）（c）グループに対応する中国語を見ると、中国語の受身文の成立にはさらに他の要因を考察しなければならないことが分かる。なお、中国語の受身のマーカーとして「被」の他、話し言葉では「叫」、「让」等が使われる。しかし「叫」、「让」は使役のマーカーとしても使われることがある。従って、受身と使役の曖昧性を防ぐため、本研究では「被」の受身だけを取り上げることにする。

本研究は両言語の受身の成立にどのようなメカニズムが働いているかを究明することを目的とする。本稿は、さしあたり中国語の受身の成立問題を取上げる。そして、稿を改め、日本語の受身文を考察する。最後に両者の受身化のメカニズムの違いを明らかにする。

2 中国語受身文の成立条件に関する諸説

前節では日本語の受身の基本的な分け方に基づき、日本語と中国語の受身との対応関係を見た。以下で具体的な先行研究と記述をいくつか取り挙げ、前節の中国語受身の例文がどのように説明されているかを見ていく。

豊嶋（1988）は、中国語の受身文成立の述語の条件として、「『被』文の述語は、ふつう結果や状態の意味を合わせ持つことが要求される」と指摘している。具体的に言えば、動詞自体が結果や状態の意味を含む動詞の場合、以下の例で示されるように動詞単独で受身文の述語となる。

（11）母亲被邻近的一阵敲门巨响惊醒。

（母は隣近所の門を叩く大きな音に目を覚まされた。）

中国語の「惊醒」はそれ自体が結果･状態の意味を含む動詞であるため、（11）の受身文が成立するというわけである。

一方、動詞それ自体が結果・状態の意味を含まなければ、動詞単独では受身文の述語にならない。助詞「了」が付加され、「動作·行為＋結果」を表すのであれば、受身文が成立する。例えば、次の例がそうである。

（12）＊**她**被激怒。

⇒**她**被激怒了。（彼女はかっとさせられた。）

「激怒」という動詞自体は結果・状態の意味を含まない。したがって、それだけでは受身文の述語にはならない。「激怒」に「了」を付けて結果含意を表すことにすれば、受身文が成立すると豊嶋（1988）は主張する。

さらに、それほど多くはないが、状態の持続を表す助詞「着」が付加される受身文が成立することがあると指摘している。

（13）在朝**鲜**的每一天，我都被一些事情感**动**着。

（朝鮮での毎日の生活で、私はいつも何がしかのことに感動させられていた。）

このようなケースを除くと、ふつう述語動詞に結果や状態を表す語句が補語として付加されることが求められる。

（14）＊衣服被他**穿**了。（服は彼に着られた。）

⇒衣服被他**穿脏**了。（服は彼に着られて汚れてしまった。）

この場合、「**穿**了」だけでは、「動作・行為＋結果」の意味を表せないため、受身文の述語になり得ない。「**穿脏**了」のように結果補語を付けて動補連語にすれば受身文として成立するとされている。

豊嶋（1988）の記述に従えば、(a) グループにおける中国語の受身文（1）と（2）の成立・不成立について次のようにまとめられる。つまり、「打」は動作·行為を表すため、裸の動詞では受身の述語にならない（例2)。その後に過去・完了を表す助詞「了」を付け、結果を含意させることで、(1) が自然な受身文となる。

中国語の受身文の成立に結果が要求される点に関して楊（1992）は豊嶋（1988）と大体同じ観点に立っている。豊嶋（1988）で挙げられた「了」、「着」や結果補語、様態補語の付加のほか、楊（1992）では経験を表す助詞「**过**」を付けて受身文を成立させる例も挙げられている。

（15）＊我被他打。（私は彼に殴られる。）

⇒我被他打**过**。（私は彼に殴られたことがある。）

さらに、楊（1992）は（c）グループで示された中国語の自動詞の受身文の成立に関して、以下のような中国語の例文を挙げている。

（16）a＊被他**坐**了，我**什么**也看不**见**了。

（彼に座られて、何も見えなくなってしまった。）

b⇒被他**这么一坐**，我什么也看不**见**了。

（彼にこうして座られて、何も見えなくなってしまった。）

通常受身文が成立しない自動詞「座」も、副詞「**这么**一」（こうして）の付加により受身文が成立するというのである。

楊（1992）の記述に従って、(c) グループ（9）（10）の中国語自動詞文を受身化してみると、以下のようになる。

（17）＊夜里很**晚**的**时**候被客人来了。（9）再掲

邱林燕 QIU Linyan

⇒夜里很**晚**的**时**候，被客人**这么一**来，害得我没休息好。
（夜遅く、お客さんにこうして来られて、ちゃんと休めなかった。）

（18）＊正**值**很忙的**时**候被部下**请**假了。（10）再掲
⇒正**值**很忙的**时**候，被部下**这么一请**假，害得工作没能**顺**利**进**行。
（忙しい時、部下にこうして休まれて、仕事が順調に進まなかった。）

木村（1992）も中国語の受身文の成立に結果が要求される点に関しては豊嶋（1988）と大体同じ観点に立っている。しかし、受身を成立させるのに、動作がもたらした結果や様態を「了」「**过**」「結果·様態補語」等の付加によって明示するだけではなく、「量的な限定」によっても中国語の受身が成立するとする。

（19）＊**桌**子被小李拍了。（机は李さんに叩かれた。）
⇒**桌**子被小李拍了**两**下。（机は李さんに二度叩かれた。）

「拍了」という表現は結果を含意すると認めにくい。そのため、それだけでは受身文が成立しない。「**两**下」（二度）のように量的な限定を示す副詞を加えることで、「イベントをより具体化」することになり、受身文が成立すると述べている

木村（1992）の「量的な限定」によるイベントの具体化という受身の成立条件と関連する研究として、楊（2009）がある。

楊（2009）は「リアリティ」という概念を提案する。「ある文が現実世界に起こる個別的、具体的な事態をリアルに表現することを『リアリティ』」と定義している。他の先行研究で指摘されてきた動詞に助詞「了」「**过**」などを付けたり、様態補語や結果補語をつけたり、量的な限定をしたりして受身を成立させることは、リアリティにつながるものだと主張する。そして中国語受身文の成立には「リアリティ」が必要とされると結論付けている。次の文でそのことを検討する。

（20）＊那个曲子被他**弹**了。（その曲は彼によって演奏された。）
⇒那个曲子被他**弹**得引人入**胜**。
（その曲は彼によって人をうっとりさせるほどの演奏がなされた。）

「**弹**」は行為を表す動詞である。助詞「了」をつけたとしても行為の完了しか表さず、結果までは含意しない。そのため、受身文は成立しないことになる。受身文を成立させるには、動詞に結果補語「引人入**胜**」（人をうっとりさせる）をつけなければならない。このような補語の付加は、行為がもたらした結果を具体的に、リアルに描写することである。よって、リアリティが成立し、受身文が生起可能となると主張する。

このように楊（2009）のリアリティの観点に従って考えれば、(a) グループで挙げた例（1）と（2）の中国語受身文の成立·不成立については、以下のように考えられるであろう。（<aグループ>中国語例文再掲）

（1）我被他打了。（私は彼に殴られた。）

（2）＊你要那**样说**的**话**，被他打。
（そんなことを言ったら、彼に殴られる。）

（2）のように裸の動詞「打」で表現するだけでは、文は事態のリアリティ

を表現することができない。それに対し、「打」に完了を表す「了」を付けると、現実世界に起こった事態になるため、リアリティを持つようになる。したがって、(1) は受身文として成立すると理解される。

では、(b) グループのような「持ち主」や「体の部分」に関する受身文に対応する中国語の受身は先行研究でどう記述されているのだろうか。(<b グループ>の中国語例文再掲)

(3) 我被李四打了**头**。
cf. 我的**头**被李四打了。

(4) 我被小**偷偷**了**钱包**。
cf. 我的**钱包**被小**偷偷**了。

(5) ?他被**黑**社会**杀**了父**亲**。⇒他父**亲**被**黑**社会**杀**了。

(6) ??我被李四**杀**了小**狗**。⇒我的小**狗**被李四**杀**了。

(7) ＊我被老**师**批**判**了**论**文。⇒我的**论**文被老**师**批**判**了。

例文 (3)、(4) と (5)、(6)、(7) は日本語では間接受身で表現され、構文的には全く同じように見える。しかし例文 (3)、(4) では、cf.で示したように、いわゆる直接受身と間接受身 (「持ち主の受身」と「体の部分の受身」) の二通りの受身文が中国語では成立する。一方、(5)、(6)、(7) では動作を直接に受ける対象を主語とする受身文、いわゆる直接受身しか成立しない。さらに、日本語受身文と構文的に対応する、いわゆる「持ち主の受身」、「体の部分の受身」の成立には、中国語母語話者の**判**断にかなりのゆれが認められる。

星英仁 (2011) では、(b) グループのような構文の中国語受身文の成立に関して、受身文表層の主語と埋め込み節内の目的語との間に所有関係の階層的制約があると述べている。そして、以下の (21) のような所有関係の階層的な制約を仮定している。

(21) 身体部分、身につけている所有物＞親族、愛玩動物＞作品、その他の所有物

(21) は、受身文の主語と埋め込み文の目的語の所有関係の種類を表している。その階層が上位であれば、(b) グループ構文の受身文が適格であると解釈され、下位であれば不自然になると星英仁 (2011) は主張する。この所有関係の階層的な制約に従うと、(3) (4) の受身文の成立と、(5)、(6)、(7) の受身文の不成立について以下のような説明が可能となる。

(3) の受身文は、主語「我」(私) と埋め込みの目的語「**头**」(頭) とが一番上位の階層にある身体部分の所有関係であるため、自然な受身文と認められる。同様に (4) の受身文でも、主語「我」(私) と埋め込みの目的語「**钱包**」(財布) とが身につけている所有物の関係であり、上位の階層にあるため、自然な受身文と認められる。それに対し、(5)、(6)、(7) の中国語の例文では、主語と埋め込みの目的語とがそれぞれ親族 (「他 (彼)」と「**父亲** (父親)」との、親族関係)、愛玩動物 (「我 (私)」と「小**狗** (子犬)」との、人と愛玩動物の関係)、作品 (「我 (私)」と「**论文** (論文)」との、人と作品の関係」) 等の所有関係にある。これらの所有関係の階層はそれほど高くない。従って、それぞれの受身文の成立には許容度の差が出るわけである。

邱林燕 QIU Linyan

以上、中国語受身文の成立条件に関する先行研究を概観し、(a) (b) (c) グループそれぞれの中国語受身文の成立·不成立条件を再検討してきた。しかしながら、これらの先行研究の記述は (a) (b) (c) グループを統一的に説明するものとはなっていない。それに、先行研究の記述に関していくつかの問題点も浮かんでくる。次の節では、その問題点を指摘する。

3 中国語受身の成立に関する諸説再考

前節では中国語受身文の成立条件に関して、例文を検討しながら、先行研究の記述を概観した。これらの先行研究の記述は、多くの受身文の成立・不成立の例を通して、いくつかの側面を明らかにした。しかし、いくつかの問題点が残る。

第1に、動詞に「了」をつけて受身文を成立させることに関する豊嶋 (1988) と楊 (1992) の説明を再検討する。動詞「V」に過去・完了を表す助詞「了」を付け加えることにより「動作·行為＋結果」を表すのであれば、「了」の付加で受身文が成立する。そうでなければ、結果や様態補語の付加が要求されると彼らは主張する。これと関連する例として、楊 (1992) では (22)、(23) のような例文が挙げられている。

(22) 我被他打了。(私は彼に殴られた。)

(23) ＊在**班级选举**中，他被大家**选**了。(クラス選挙で、彼は皆に選ばれた。)
⇒在**班级选举**中，他被大家**选上班长**了。(クラス選挙で、彼は皆に班長に選ばれた。)

(22) の受身文で、「打」は動作·行為を表す。それに「了」をつけ「打了」とすると、結果含意を表すことになる。それが受身文として成立する条件であると説明している。それに対し、(23) の「**选**」(選ぶ) は「了」を付け加えても、「選ぶ」という働きかけが完了したことは表すが、「班長に選出する」という結果の実現は含意しない。したがって、受身文として成立しない。この場合は結果補語「**选上班长**」をつけ加えなければならないと楊 (1992) は主張する。しかし、「打了」(殴った) が結果を含意すると認めることには疑問がある。「打了」(殴った) と「**选**了」(選んだ) で結果を含意するかどうか決定的な差異があるのだろうか。(22) (23) の受身文の成立の差異を「打了」と「**选**了」が結果を含意するかどうかに帰結するのは無理があるように思われる。

第2に、楊 (2009) では「リアリティ」という概念に基づき説明が行われている。前節ではこの「リアリティ」の観点から、(1) と (2) の受身文の成立·不成立についての説明を見た。しかしながら、楊 (2009) の「リアリティ」という概念を見ると、疑問が生じる。楊 (2009) は「リアリティ」を以下のように定義している。

「ある文が現実世界に起こる個別的、具体的な事態をリアルに表現するこ

とを『リアリティ』とする。」

しかし、「リアルに表現する」ということについて楊（2009）では明確に説明されていない。どのような表現の仕方がリアルに表現することになるのだろうか。楊（2009）では以下のような例が挙げられている。

（20）＊那个曲子被他弹了。（その曲は彼によって演奏された。）

⇒那个曲子被他弹得引人入胜。

（その曲は彼によって人をうっとりさせるほどの演奏がなされた。）　（再掲）

すでに第2節で述べたように、このような受身文の成立条件について、楊（2009）は次のように説明している。「弹」は行為を表す動詞である。助詞「了」をつけたとしても行為の完了しか表さず、結果までは含意しない。そのため、受身文は成立しない。受身文を成立させるには、動詞に結果補語「引人入胜」（人をうっとりさせる）をつけなければならない。このような補語の付加は、行為がもたらした結果を具体的に、リアルに描写することである。よって、リアリティが成立し、受身文が生起可能となるとする。

この説明を見て分かるように、楊（2009）に使われている「リアルに表現する」または「リアリティ」という中国語受身の成立条件は、他の先行研究に言われている結果補語や結果含意等の概念とほぼ同じであると考えられる。この意味で、楊（2009）の「リアリティ」の観点は、豊嶋（1988）と楊（1992）の結果含意の観点からの説明と同じように、（22）の「打了」は受身文を成立させる一方、（23）の「选了」は受身文を成立させないのはなぜかについては説明できない。

第3に、中国語の自動詞の受身の成立に関する楊（1992）の説明にも疑問が残る。たしかに（8）では「哭」（泣く）にその結果「醒了」（目を覚まされた）を付け加えて自動詞の受身文が成立する。

（8）＊半夜被孩子哭了。（夜中子供に泣かれた。）

⇒半夜被孩子哭醒了。（夜中子供に泣かれ、目を覚まされた。）（再掲）

楊（1992）では、以下のような例文を通して、「这么一」（こうして）を付け加えると、通常受身文が成立しない自動詞も、受身文が成立すると述べられている。

（16）a＊被他坐了，我什么也看不见了。

（彼に座られて、何も見えなくなってしまった。）

b⇒被他这么一坐，我什么也看不见了。

（彼にこうして座られて、何も見えなくなってしまった。）　（再掲）

cf.他坐在了我的前面，我什么也看不见了。

（彼は私の前に座った。私は何も見えなくなってしまった。）

一見すると（16）の例文はすべて前件と後件で因果関係を表している。しかし「这么一」のない（16a）が文法的に成立しないのに対して、「这么一」が付加される（16b）は問題なく成立する。（16）の二文の違いは「这么一」だけにある。こうして「这么一」（こうして）の付加は中国語自動詞の受身文の成立条件のように見える。しかし、「这么一」が付加されるだけで受身文が成立するとは主張できない。

（16）c＊被他这么一坐。（彼にこうして座られた。）

その行為による結果を別の文として後続させなければならないのである。この点は自動詞の受身文に限らず、他動詞の受身文からも検証できる。(24a)のように元々単文で成立する他動詞の受身文が「这么一」だけを付加されると、(24 b) のようになる。(24 b) は (16c) と同じように、文が終わっていなく、単文としては成立しない。「这么一」が付加されると構文上では (24c) のようにその行為による結果を後続させなければならない。

(24) a 张三被李四打了。(張は李に殴られた。)
b* 张三被李四这么一打。(張は李にこうして殴られた。)
c张三被李四这么一打，就倒在地上了。(張は李にこうして殴られて、倒れてしまった。)

従って、「这么一」(こうして) の付加は果たして中国語の受身文の成立条件ともならない。以下の例文でさらに検討する。

(25) *夜里很晚的时候被客人来了。(夜遅くお客さんに来られた。)
(26) *夜里很晚的时候被客人来了，害得我没休息好。
(夜遅くお客さんに来られた。そのため、ちゃんと休めなかった。)
(27) 夜里很晚的时候客人来了，害得我没休息好。
(夜遅くお客さんが来た。そのため、私はちゃんと休めなかった。)

よく言われているように中国語では (25) のような自動詞の受身文は通常成立しない。(26) のようにその行為による結果を表す文「害得我没休息好」(ちゃんと休めなかった) を明示しても、「被」の受身文としては成り立たない ((16a) と同じである)。(27) のように受身文ではなく、二つの能動文で表すことが必要である。さらに、(27) は因果関係を表す複文と考えることも可能だが、二つの独立文が連続する重文と解釈も可能である。(28) のように「这么一」(こうして) を付け加えて自動詞の受身文が生起する場合はどうだろうか。

(28) 夜里很晚的时候被客人这么一来，害得我没休息好。
(夜遅くお客さんにこうして来られて、ちゃんと休めなかった。)

(25)–(28) のような自動詞受身文の成立・不成立を見れば、楊 (1992) で指摘された「这么一」(こうして) の付加は一見中国語自動詞の受身文の成立条件になるように見える。しかし、以下の例文のように独立文には生起しない。

(29) *夜里很晚的时候被客人这么一来。
(夜遅くお客さんにこうして来られた。)

受身文が成立するには、(28) のように自動詞行為による結果を表す文「害得我没休息好」(ちゃんと休めなかった) が「被」の受身文に後続しなければならない。これらのことから分かるように、(29) のように「这么一」(こうして) を付け加えるだけでは不十分で、受身成立のためには、必ず結果を表す事態を後続させなければならない。この意味で、「这么一」を付け加えて成立する受身文はすべてが主節に先立つ従属節にあると考えられる。

さらに、中国語には (30ａ) のように、「这么一」(こうして) だけを用い、自動詞の行為による結果事態を表す文を明示すれば、「被」を用いた受身文にする必要はない。ちなみに「这么一」(こうして) のある文は、(30b) のよ

うに能動文であっても、後ろに結果を表す内容が後続しなければ、単文としては成立しない。

（30）a夜里很**晚**的**时**候客人**这么**一来，害得我没休息好。

（夜遅くお客さんがこうして来て、私はちゃんと休めなかった。）

b＊夜里很**晚**的**时**候客人**这么**一来。

（夜遅くお客さんがこうして来た。）

従って、「**这么**一」は受身文の成立条件だというより、むしろ中国語の条件構文「一…就…」（…と（して）、…）の一種のバリエーションだと言える。この意味で、「**这么**一」の追加は量的な限定語を付け加え、事象を限定する働き、つまり後の節で議論する事象の「他動性」を増す働きではない。「**这么**一」の付加によって受身文が従属節の中にあることが示され、後続文を主節として結果を述べる場合は、受身が後景化して背景的状況との解釈が優先される。これがこれらの文の適格性を保証する。従って、「**这么**一」の付加は中国語受身の成立条件ということはできず、従属節にあることを明示するだけである。

第4に、(b) グループの中国語の間接受身文の成立についても再検討する。星英仁（2011）は、受身文の主語と埋め込み構文の目的語の間における（21）で示したような所有関係の階層関係に基づき説明を行っている。

（21）身体部分、身につけている所有物＞親族、愛玩動物＞作品、その他の所有物　（再掲）

しかし、(b) グループ構文の中国語受身の成立にそういう所有関係の階層関係がなぜ必要とされるかが論じられていない。また、（21）の所有関係の階層に基づき、(b) グループの中国語受身文の成立・不成立について説明がついたように見えるが、果たして十分な説明になるだろうか。実際に詳しく検討してみると、以下のような問題が出てくる。

（4）我被小**偷偷**了**钱包**。（私は泥棒に財布を盗まれた。）

cf. 我的**钱包**被小**偷偷**了。（私の財布は泥棒に盗まれた。）　（再掲）

（31）?我被小**偷偷**了**车**。

（私は泥棒に車を盗まれた。）

⇒我的**车**被小**偷偷**了。

（私の車は泥棒に盗まれた。）

所有者である「我」（私）と所有物である「**钱包**」（財布）、「**车**」（車）の所有関係は共通なはずである。（4）ではどちらを主語とする受身文も成り立つ。一方、（31）では所有者が主語に、所有物が埋め込み構文の目的語になる受身文の成立には**判**断の揺れが生じる。これはなぜだろうか。（21）のような所有関係の階層の記述であえて説明するとするなら、所有物の「**钱包**」（財布）は所有者の「我」（私）にとって身につけている所有物であるのに対し、「**车**」（車）は所有者の身につけられず、所有階層の最下位の「その他の所有物」になると取られるため、（4）と（31）の違いが出るのだと説明できよう。しかし、なぜ、bグループ構文の中国語受身文の成立に、所有物が身につけられているかどうかが関係するのであろうか。この点については今まで議論されていない。

以上、今まで議論してきた先行研究について、いくつかの問題点を述べながら再検討してきた。今までの先行研究では、(a)（b）(c）グループの中国語受身文の成立についてはそれぞれ別々に記述されている。結果が要求されることや、所有関係の階層関係が必要されることなどといった個別の成立条件を統一的に扱うことはできないのであろうか。次の節では、以上述べてきた先行研究の問題点の解決策を求めながら、中国語の受身文の成立を「他動性」といった観点から統一的に説明する代案を提案する。

4 中国語受身の成立と他動性に基づく分析

前節では(22)(23)の受身の成立に関する先行研究（豊嶋[1988]、楊[1992]、楊［2009]）の記述について問題点を指摘した。

（22）我被他打了。（私は彼に殴られた。）

（23）＊在班**级选举**中，他被大家**选**了。

（クラス選挙で、彼は皆に選ばれた。）

⇒在班**级选举**中，他被大家**选上班长**了。

（クラス選挙で、彼は皆に班長に選ばれた。）　（再掲）

すでに述べたように「打了」（殴った）が結果を含意すると認めるのは疑問がある。したがって、(22)（23）の受身文の成立の差異を「打了」と「**选**了」が結果を含意するかどうかに帰結させるのは無理がある。(22)（23）の受身文の成立の差異は、結果を含意するかどうかに求めるべきではなく、他の性質から解釈しなければならない。本研究では、事象の「他動性」(transitivity)という概念を導入し、解釈を試みる。

「他動性」(transitivity）は、文の命題レベルにおける各要素から考察が行われている。他動性考察の代表的な研究としてHopper and Thompson（1980）が挙げられる。Hopper and Thompson（1980）では他動性（transitivity）に関わる意味特徴が以下表1のように規定されている。

■ 表1

	HIGH	LOW
PARTICIPANTS(参加者)	2 or more participants A and O	1 participant
KINESIS（動作性）	Action	non-action
ASPECT（相）	telic	atelic
PUNCTUALITY(時間性)	punctual	non-punctual
VOLITIONALITY(意志性)	volitional	non-volitional
AFFIRMATION（肯定）	affirmative	negative
MODE（ムード）	realis	irrealis
AGENCY（動作主性）	A high in potency	A low in potency

	HIGH	LOW
AFFECTEDNESS OF O（目的語の影響性）	O totally affected	O not affected
INDIVIDUATION OF O（目的語の個別化）	O highly individuated	O non-individuated

Hopper and Thompson（1980）の他動性というのは程度性を呈しているものである。表1で示される「HIGH」というコラムの意味特徴が多ければ多いほど、その構文に伴う他動性が基本他動性（CARDINAL Transitivity）に近づく。上の表で挙げられている他動性に関わる十の意味特徴の中の「PARTICIPANTS（参加者）」という項目について、Hopper and Thompson（1980）の他動性という概念では、それが一つの場合でも低いながら他動性は認められる。本研究で受身を検討する際に関わる他動性には「PARTICIPANTS（参加者）」が通常二つ以上であるが、後に見られるように、動詞と目的語が連語化した場合は「PARTICIPANTS（参加者）」が一つと見なされることもあり、当然そのような場合は他動性が低くなる。本研究ではHopper and Thompson（1980）の「他動性」を援用しながら、ある主体がある対象に働きかける度合いを「他動性」とする。

例えば上記（22）と（23）は他の要素は基本的に同じである。「打了」（殴った）と「选了」（選んだ）は対象に対する「働きかけ性（動作性）」が異なることから文全体の「他動性」が異なり、受身文の成立に容認性の違いが出ると解釈される。

「打了」（殴った）は対象に直接に接し働きかける動作と見なせる。それに対し、「选了」（選んだ）は対象に対して直接に接し働きかけるのではなく、一種のメンタルコンタクトとして認められる。この意味から「打了」（殴った）は「选了」（選んだ）より対象への働きかけ性が強いと考えられる。従って、「打了」（殴った）等のように働きかけ性の強い場合では、行為による結果を明示しなくても、「了」「过」の付加だけで受身が成立する。

対象に直接に接する動詞であれば「打」（殴る）と同じように「了」「过」付加だけで受身が必ずしも成立するわけではない。例えば、以下の「拍」（叩く）が挙げられる。

（32）??a 张三被李四拍了。（張さんは李さんに叩かれた。）

b 张三被李四拍了一下（張さんは李さんにちょっと叩かれた。）

／张三被李四拍晕了。（張さんは李さんに叩かれ、ぼうっとした。）

「拍」（たたく）は「打」（殴る）と同じように対象に直接に接し働きかける動詞であるが、（32a）は受身文として容認性は低い。（32b）のように「一下」（ちょっと～する）を付け加え、事態の量的限定をしたり、「拍」（叩く）の結果を表す補語「晕了」（ぼうっとした）等を付け加えたりしなければ受身文は成立しない。

また、「打」でも、必ずしも「了」「过」の付加だけで受身が成立するわけではない。例えば、以下のような文がある。

（33）＊a电话被打了。（電話はかけられた。）

b电话被打爆了。（受話器が壊れるほど電話された）

邱林燕 QIU Linyan

「打**电话**」（電話をかける）のように連語化している場合は対象への働きかけ性が低くなり、（33a）のような受身文は成立しない。「打」に様態・結果を表す補語「爆了」などを付け加えなければならないのである。

これらのことから、中国語の受身の成立は事象の「他動性」と関連することが分かる。「打」（殴る）のように述語動詞の働きかけ性が十分強い場合であれば、動作による結果を明示しなくても、事態完結を表す「了」と、経験を表す「**过**」だけで受身文を成立させることができる。この意味で、中国語の受身文の成立には、「働きかけ性の強さ」という制約が先行研究で議論してきた「結果性」や「具体化」を**包**括するものとして仮定できる。一方、「拍」（叩く）のように「対象に直接働きかける」動詞ではあるが、働きかけ性がそれほど高くない述語動詞、または「打**电话**」（電話をかける）のように連語化によって対象への働きかけ性が低くなる述語動詞の場合には、受身文が成立するのに、結果補語や事態の量的限定を表す補語などの付加が必要となる。

もし事象の「他動性」（Transitivity）が中国語受身文成立の統一的条件だと仮定するなら、今まで議論されてきた結果補語や事態の量的限定を表す補語などの付加は、事象の「他動性」を高めることとつながるであろう。以下では「他動性」（Transitivity）という概念に基づき、特に「ASPECT（相）」「MODE（ムード）」「INDIVIDUATION OF O（目的語の個別化）」の論点から、中国語受身の成立条件を考察する。

まず「ASPECT」についてHopper and Thompson（1980）では、以下のように記述されている。

ASPECT：An action viewed from its endpoint, i.e. a telic action, is more effectively transferred to a patient than one not provided with such an endpoint. In the telic sentence *I ate it up*, the activity is viewed as completed, and the transferal is carried out in its entirety; but in atelic *I am eating it*, the transferal is only partially carried out.

「ASPECT」についての記述から分かるように、完結点（endpoint）を明示する動作・行為は限界的行為（telic action）となる。前章の中国語受身の成立条件に関する先行研究の検討を通して、中国語受身文の成立には動作・行為の結果が密接に関係していることが分かった。動作・行為の結果は、正に動作・行為の完結点（endpoint）を明示する手段の一つだと考えられる。従って、「動詞に結果補語、又は量的な限定語をつけて受身文を成立させる」という先行研究で述べられた中国語受身の成立条件は、事象の他動性の観点から言えば、限界的事象であるか、ないかに求められる。従って、（32）（33）の受身文の成立について事象の限界性から以下のように説明がつく。

（32）??a **张**三被李四拍了。（張さんは李さんに叩かれた。）

b **张**三被李四拍了一下（張さんは李さんにちょっと叩かれた。）

／**张**三被李四拍**晕**了。（張さんは李さんに叩かれ、ぼうっとした。）

（33）＊a **电话**被打了。（電話はかけられた。）

b **电话**被打爆了。（受話器が壊れるほど電話された）　（再掲）

上の（32）（33））の受身文では、aの事象に対して、bは結果補語や量的な限定語などが付いている。そのため「限界的事象」になり、「他動性」が増

すことから受身文が成立するのである。

さらに以下の例文を見てみる。

（34）＊被一个**纠缠**不清的人在公司**门**口等了。

（邪魔な者に会社の正門で待たれた。）

⇒被一个**纠缠**不清的人在公司**门**口等了三个小**时**。

（邪魔な者に会社の正門で三時間も待たれていた。）

（35）＊半夜被孩子**哭**了。

（夜中子供に泣かれた。）

⇒半夜被孩子**哭**醒了。（夜中子供に泣かれて目を覚まされた。）

（36）＊被雨下了。（雨に降られた。）

⇒被雨淋了。（雨に降られて濡らされた。）

（37）＊半夜被客人来了。（夜中お客さんに来られた。）

⇒半夜客人来了。（夜中お客さんが来た。）

例文（34）において、「等」（待つ）は結果を含意しない継続動詞である。後ろに完了の動詞接尾辞「了」を付けて「等了」と表現してもその事象の限界は明確にならない。そのため「等」（待つ）に事象の限界を明示する「三个小**时**」（三時間）等を付け加えてはじめて適格な受身文として成立する。

また、（35）の自動詞の受身文では、動作・行為（「**哭**」（泣く））による結果「醒了」（目を覚まされた）を明示すれば、適格な受身文になる。

（36）の「被雨**淋**了」は、従来日本語の受身文「雨に降られた」に対応するものとされている（門和沙日娜［2007］）。しかし、日本語の「雨に降られた」をそのまま中国語に訳すと、「＊被雨下了」になるが、それは中国語の受身文としては成立しない。実際に成立するのは、「被**淋**了」（濡らされた）という表現である。なぜかと言えば、「被**淋**了」（濡らされた）が、「下雨」（雨が降る）という事態の結果を明示するからである。それにより全事態に限界性が与えられ、受身文として成立するのである。逆に完結点（endpoint）が明示されない瞬間動作・行為を表す自動詞は受身文にはならず、能動文で表すことになる（例37）。

限界的事象の成立条件を仮定すると、（38）のように「打（殴る）」という行為に結果補語「断了腿（足を折られた）」を付加し受身文を成立させることが理解できよう。ただし「打（殴る）」のような他動性が強い動詞の場合では、その行為による結果が明示されなくても完了を表す助詞「了」を付加するだけでも（39）のように適格な受身文となることに留意されたい。

（38）李四被**张**三打断了腿。

（李さんは張さんに殴られて足を折られた。）

（39）李四被**张**三打了。（李さんは張さんに殴られた。）

また、中国語受身文の中には、第1節で挙げた例文（2）のようなものがある。

（2）＊你要那**样说**的**话**，被他打。

⇒你要那**样说的话**，要／会 被他打的。

（そんなことを言ったら、彼に殴られるよ。）　（再掲）

（2）の例文のように、事態がまだ発生していない状況での発話で「被他打」（彼に殴られる）は中国語の受身としては成立しない。受身文として成立させ

邱林燕 QIU Linyan

るためには、矢印で示したように、「要」か「会」のような事象の実現を予想させる要素の付加が必要となる。先行研究では、なぜ「要」か「会」の付加が必要かについては触れられていない。本稿では、他動性の概念の一つである事象の現実性「MODE」の観点から説明を試みる。

「MODE」について、Hopper and Thompson（1980）では、以下のように述べられている。

MODE：This refers to distinction between 'realis' and 'irrealis' encoding of events. An action which either did not occur, or which is presented as occurring in a non-real（contingent）world, is obviously less effective than one whose occurrence is actually asserted as corresponding directly with a real event.

今まで議論してきたように「打」のような「働きかけ性」の強い動詞では、完了を表す助詞「了」、または経験を表す助詞「过」をつけ、受身文を成立させる。このようなことを「MODE」の観点から理解すれば、完了を表す助詞「了」、または経験を表す助詞「过」等は、その文が表す事態が現実的な世界の事態として成立することを表すためだと言える。しかし、(2) のような文は事態がまだ発していない状況の発話である。そのため、完了を表す助詞「了」、または経験を表す助詞「过」はつかない（例40）。

（40）＊你要那**样说的话**, 被他打了。（そんなことを言ったら、彼に殴られた。）
＊你要那**样说的话**，被他打**过**。（そんなことを言ったら、彼に殴られたことがある。）

(2) の矢印で示したように事象の実現を予想させる要素である「要」か「会」などの付加があれば受身文は成立する。「要」か「会」の付加は今現在の現実ではないが、現実のように述べる、つまり、仮想現実（virtual reality）を作る機能を果たす。(2) の受身文では、「要」か「会」が付加された矢印の文の方が現実性が増し、そのため、受身文が成立すると考えられるのではなかろうか。以下の例も中国語受身の成立に現実性が要求されることを裏付けている。

（41）能動文：燕子**吃**稻谷。（ツバメは米を食べる。）
受身文：＊稻谷被燕子吃。（米はツバメに食べられる。）
cf. 稻谷会被燕子吃。（米はツバメに食べられることがある）

（42）能動文：燕子吃了稻谷。（ツバメは米を食べた。）
受身文：稻谷被燕子吃了。（米はツバメに食べられた。）

（41）は「ツバメは米を食べる動物である」のように一般の個別事象を超えた一般真理のことを述べている。事象の他動性の「MODE」から言えば、非現実「irrealis」の発話となる。従って、受身文は成立しない。それに対して（42）は現実的に起きた出来事を述べている。「MODE」の観点から言えば、現実「realis」となる。それによって受身文が成立するわけである。

他動性を基盤として成立する中国語の受身は、さらに、Hopper and Thompson（1980）の他動性項目の1つである「INDIVIDUATION OF O（目的語の個別化）」とも関わる。「INDIVIDUATION OF O（目的語の個別化）」と他動性の関係としては、目的語が「INDIVIDUATED」（個別的）であれば、事態の他動性が高いとされている。そして、「INDIVIDUATION OF O（目的語の

個別化)」について、Hopper and Thompson（1980）は以下の表のように左のほうが「INDIVIDUATED（個別的)」であり、右のほうが「NON−INDIVIDUATED（非個別的)」であると記述している。

INDIVIDUATED	NON−INDIVIDUATED
proper	common
human, animate	inanimate
concrete	abstract
singular	plural
count	mass
referential, definite	non−referential

以上の「INDIVIDUATED（個別的)」と「NON−INDIVIDUATED（非個別的)」の区別記述を基に、以下の例文を検討する。

（43）他吃了苹果。（彼はりんごを食べた。）
　　＊苹果被他吃了。（りんごは彼に食べられた。）
（44）他吃了一个苹果。（彼は一つのりんごを食べた。）
　　??一个苹果被他吃了。（一つのりんごは彼に食べられた。）
（45）他吃了那个苹果。（彼はそのりんごを食べた。）
　　那个苹果被他吃了（そのりんごは彼に食べられた。）

（43)−(45）は全部「りんごを食べる」行為と関連する事態である。しかし、受身にすると、それぞれ文法の容認性が異なる。

（43）の目的語「苹果」（りんご）は「梨」（なし）などとは区別される「common（一般的)」な概念である。「吃了苹果」（りんごを食べた）ということからは「梨や他の果物ではなく、りんごを食べた」ということは分かるが、具体的に一体どのぐらい食べたか分からない。そのため「吃了苹果」は個別的な事象とは言えない。従って他動性が低くなり、（43）のような受身文は成立しない。一方、「苹果」（りんご）を数量的に限定し、「一个苹果」（一つのりんご）にすると、量的には限界を持った行為となるが、実際には「一个苹果」(一つのりんご) は「non−referential」(非特定的) である。「他吃了一个苹果」(彼が一つのりんごを食べた）という事象は特定しにくく、個別的な事象とは言えない。そのため、受身文は成立しない（例44)。もし、「non−referential」（非特定的）な「一个苹果」（一つのりんご）を「referential」（特定的）にし、「那个苹果」（そのりんご）にすると、目的語の「INDIVIDUATION」（個別性）が高くなり、事象全体が個別的な事象となって、他動性が高くなる。したがって、受身文が成立することになる（例45)。このように、目的語の「INDIVIDUATED（個別的)」性が「個別的事象」に関わり、他動性が高まることで、受身文の成立に影響を与えると言える。

以上Hopper and Thompson（1980）の「ASPECT（相)」「MODE（ムード)」「INDIVIDUATION OF O（目的語の個別化)」に基づき中国語受身を分析した。中国語受身の成立は事象レベルで「限界的事象」、「現実的事象」、「個別的事象」と関わりがあることが分かった。このように事象の他動性に中国語の受身成立条件を求めることを通して、先行研究で述べられてきた成立条件を統一的に説明することができる。

邱林燕 QIU Linyan

命題レベルにおける事象の他動性が中国語受身成立のメカニズムと認められるならば、無生物か生物かに関わらず、働きかけの直接対象は他動性を受け、受身の主語となることができる。このことは、中国語受身の成立には、日本語受身にある主語の人称制限や「ウチ」「ソト」の関係に関しては制約がないことと関連する。Hopper and Thompson（1980）の表1で示される「他動性」の項目にはないが、本研究では他動性を受ける主体という観点から星英仁（2011）の階層関係を再検討してみよう。

（21）身体部分、身につけている所有物＞親族、愛玩動物＞作品、その他の所有物　（星英仁［2011：11］）（再掲）

本研究の第3節ですでに指摘したように（21）の所有関係の階層は必ずしも（b）グループのような構文の受身文の成立について十分な説明にはなっていない。そして、所有物について、なぜ身につけている、つけていないかを区別する必要があるかについて今までは議論されていない。

「他動性」の観点からは、以下のような説明が可能となる。（21）の一番上位の階層にあるのは、「身体部分、身につけている所有物」である。人間は自分の体の部分、又は身につけている物と一体であるため、他動性を持つ行為の直接対象となる。（b）グループの（3）、（4）のような中国語では、働きかけの直接対象は所有者であることも、所有者の身体の一部であることも、所有される物品であることも想定できる。これらを受身文の表層主語とすることはすべて可能となる。（＜bグループ＞中国語例文）。

（3）我被李四打了**头**。（身体部分）
　　cf. 我的**头**被李四打了。

（4）我被小**偷偷**了**钱包**。（身についている物）
　　cf. 我的**钱包**被小**偷偷**了。　（再掲）

それに対して、次の階層にある「親族、愛玩動物」や最後の階層にある「作品、その他の所有物」が受身文の埋め込み節の目的語となる場合を検討する。これらの間接受身では主語と目的語（対象）が実際には一体になっていないため、所有者が外からの働きかけをそれほど受けず、他動性を持つ行為の影響を直接受けていない。このような所有関係の階層では、所有者が表層主語になる受身文は成立しにくい。また、他動性を受ける対象が（3）（4）ほど明白ではないため、階層関係によって**判**断のゆれが認められる。一方、（5）（6）（7）の矢印で示したように、動作を直接に受ける目的語を主語にする受身文は疑問なく成立する。これらは行為の他動性の明らかな対象となっているからである。

（5）?他被**黑**社会**杀**了父**亲**。（親族）
　　⇒他父**亲**被**黑**社会**杀**了。

（6）??我被李四**杀**了小狗。（愛玩動物）
　　⇒我的小狗被李四**杀**了。

（7）＊我被老**师**批**判**了**论**文。（作品）
　　⇒我的**论**文被老**师**批**判**了。　（再掲）

上の（4）では二通りの構文の受身が成立する一方で、以下（31）では動作を直接に受ける対象を主語とする受身文の方が成立しやすい。

（31）?我被小偷偷了车。
（私は泥棒に車を盗まれた。）
⇒我的车被小偷偷了。
（私の車は泥棒に盗まれた。）（再掲）

「我」（私）と「车」（車）との所有関係は、「我」（私）と「钱包」（財布）との所有関係とほぼ同様である。しかし、（4）の間接受身文は成立するのに対し（31）の間接受身文の成立には判断のゆれが出る。動作を直接に受ける対象である「车」（車）を主語とする受身文は問題なく成立するが、所有者を主語とする受身文は成立しにくい。それで他動性を受ける主体が動作の対象と一体になっているかどうか、つまり、他動性の受け方から再検討してみよう。

「钱包」（財布）と「车」（車）とは所有者である「我」（私）と一体になっているかどうかという点において異なる。一体となる「钱包」（財布）の場合では、他動性の対象が所有者とも所有物とも解釈できる。一体にならない「车」（車）の場合、「小偷」（泥棒）が及ぼす他動性の対象は「车」（車）のみであり、所有者には至らない。そのため、「我」（私）を主語とする受身文には他動性が欠如し、受身は成立しにくいと考えられる。

以上他動性の観点から、中国語受身文成立のメカニズムを探求してきた。「限界的事象」、「現実的事象」、「個別的事象」を考察に含め、「他動性」という概念を中国語受身文成立の要因であると結論づけた。

5 まとめ

本稿では、日本語受身の分類からスタートし、それに対応する中国語の受身文の成立条件を考察した。日本語の受身が複雑だと言われているが、中国語の受身も決して簡単ではないことが分かった。中国語受身文の成立に関する先行研究を再考した上で、新たに他動性の観点を導入し、中国語受身の成立を統一的に説明することを試みた。「限界的事象」、「現実的事象」と「個別的事象」なども中国語受身文の成立に関与することも明らかにした。このように他動性に基づいた分析は、豊嶋（1988）、楊（1992）、楊（2009）などの先行研究の問題点を解消し、星英仁（2011）のような階層関係の存在理由を明確に説明できる。

本稿は、「他動性」が中国語の受身の成立要因であると主張した。しかし、他の側面、例えば「AFFECTEDNESS OF O（目的語の影響性）」からの考察も先行研究に存在する（木村［2000］）。ただし中国語の受身文の表す「影響」は日本語の「受影受動文」の「影響」とは必ずしも同じではない。中国語の受身文の表す「影響」は、今まで議論されてきたように基本的には述語に結果補語などの付加によって明示される。その影響を受けるのは、受身文の主語（人かモノかに関わらず、基本的には、動作の直接対象）である。

また、受身文という構文には能動文構文とは異なり、それなりの構文的意味があると考えられる。「中国語の受身文の多くが迷惑（不如意）の事態を表すのに用いられる」（楊［1992］）、大河内［1982］）。「しかし、1920年以降ヨーロッパ語の影響が次第に広がり、今では好ましいことにも主動者のない場合にも使われる」（大河内［1982］）などの記述もある。中国語の受身の構文は中立的用法や好ましい事態の用法もあるが、基本的に好ましくない、不如意の意味を表すという点で日本語と共通する。ただし、好ましくない事態だからといって、必ずしも受身文が成立するわけではない。

（46）＊很小的**时**候，他被父**亲**死了。（彼は小さい時父に死なれた）

cf．我被好友**误**会了。（私は親友に誤解された。）

中国語の受身は「他動性」に基づき成立し、受身文が成立してから、受身文としての構文的意味が文全体の意味解釈に付与されるように考えられる。つまり、中国語の受身の成立には、事象の「他動性」が受身の構文的意味より優先されるのである。

「他動性」が中国語受身の成立メカニズムだと主張できるなら、一方、それと対照的に見た日本語受身の成立メカニズムはどこにあるだろうか。日本語の受身に関する一連の先行研究（工藤［1990］、柴谷［1977］、高見［2000］［2011］、坪井［2003］、益岡［1987］［1991］［2000］、山下［1992］［2001］等）を概観すると、日本語の受身は「他動性」を基盤に成立する中国語の受身とは異なり、話し手の主観である「受影性」と密接に関わる。「受影受動文」と言われる日本語の受身文は中国語とは異なり、その「影響」は必ずしも文に明示しなくてもいい。「私は先生に褒められた」のように好ましい影響を表す場合もあるが、基本的には中国語受身文の構文的意味と同じように好ましくない影響を表す。従って、日本語受身文の構文的意味は、「受益」の「テモラウ」文と対立をなすと考えられる。そして、その影響を受けるのは、必ず話者、または主題となる「話者よりの人間」（ウチよりの人間）に限られる。つまり、日本語の「受影受動文」の成立には主語が「話者よりの人間」であるという人称制限が存在するのである。このように、「話者よりの人間」が事態から受ける受影性が日本語受身文の成立に大きく関わる。従って、日本語では話者、または文の主題が事態からの「受影性」を十分感じられる場合であれば、「小さいとき父親に死なれた。」のような中国語にない受身文も成立するわけである。

要するに、日本語受身の成立には話し手、もしくは文の主題が事態から受ける影響性が肝要なポイントとなるのである。「他動性」は命題レベルの概念であるのに対し、「受影性」は話者の視点に関わる「モダリティ」レベルの概念と捉えることも可能であろう。この問題については稿を改めて考察する。

参考文献

于康（2012）「『目的語残存受身文』における目的語残存の条件について―中国語との対照という視点から―」『国文学攷』214pp.1−14．広島大学国語国文学会．

大河内康憲（1982）「中国語の受身」『講座日本語学10』pp.319−332明治書院．

木村英樹（1992）「BEI受身文の意味と構造」『中国語』6月号、第389号pp.10−15.中国語友の会.
木村英樹（2000）「中国語ヴォイスの構造化とカテゴリ化」『中国語学』247 pp.19−39.
工藤真由美（1990）「現代日本語の受動文」『ことばの科学４』pp.47−102. むぎ書房.
柴谷方良（1977）「『迷惑受身』の意味論」川端善明・仁田義雄編『日本語文法　体系と方法』pp.1−22. ひつじ書房.
高見健一（2000）「被害受身文と『〜てもらう』構文—機能的構文論よる分析—」『日本語学』19−5 pp.215−223. 明治書院（編）.
高見健一（2011）『受身と使役』開拓社.
坪井栄治郎（2003）「受影性と他動性」『言語』4 pp.50−55.
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.
豊嶋裕子（1988）「“被”字句の成立条件にかんして」『中国語学』235 pp.99−108.日本中国語学会.
仁田義雄（2009）『日本語の文法カテゴリをめぐって』ひつじ書房.
星英仁（2011）「間接受身文の事象と統語構造について」『中日理論言語学の親展望 1 統語構造』pp.1−32.くろしお出版.
Hopper and Thompson（1980）`Transitivity in grammar and discourse`Language 56. pp.251−299.
益岡隆志（1987）『命題の文法』くろしお出版.
益岡隆志（1991）「受動表現と主観性」『日本語のヴォイスと他動性』pp.105−121. くろしお出版.
益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版.
門和沙日娜（2007）「日中受身表現の対照—間接受身文に焦点を当てて—」昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究2 pp.51−66.
山口直人（2005）「非対格化と中国語の四つの言語現象—遊離数量詞、受身、結果複合動詞、『V着』存在文—」語学教育研究叢第23号 pp.37−48.
山下好孝（1992）「日本語受け身接辞のスコープ」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第13巻 pp.106−124.
山下好孝（2001）「迷惑受身のプロトタイプ」『北海道留学生センター紀要』第5号 pp.1−15.
楊凱栄（1992）「文法の対照的研究—中国語と日本語」『日本語と日本語教育』第5巻 pp.312−340.明治書院.
楊彩虹（2009）「中国語受身文の成立条件—日本語との対照研究を通して—」NEAR.conference proceedings working papers NEAR−2009−10 pp.1−23.

（平成25年1月7日受理、1月17日採択）